

対象との同一化を創造的に機能させる基盤としての結合対象へ —よい対象との失われた共通基盤を求めて—

岩 橋 宗 哉*

この論文では、よい対象との同一化の前提条件であるよい対象との共通基盤—よい自己—(Klein, 1955)を確信していく過程に影響を与える要因として、対象の不在に対する防衛、 α 機能、羨望、病理構造体、結合対象の諸概念を取り上げて概観し、それらの関連について検討した。

よい対象との共通基盤—よい自己—は、原初的な愛情関係の中で体験されるが、全体としての自己の認識の芽生えとともに、よい対象が自己と異なることを認識せざるを得ず、対象の不在に対する防衛、羨望、自己愛的な病理構造体の要因によって、共通基盤は見失われる。また、羨望により、よい対象は悪い結合対象となる。しかし、よい対象が結合対象の中にあつて、よい存在として α 機能を提供し続けることが、“異なる”存在であるよい対象との間に共通基盤を見出し、それを確信することにつながる。そのような過程を経て結合対象は、自己が、“異なる”よい対象に同一化して取り入れ、自己と“異なる”対象との間でよいものを創造するための基盤となる創造的な結合対象となっていく。以上について考察した。

1. はじめに

どのような種類の心理療法であっても、次のような過程は共通しているのではないだろうか。

クライアントは、自らの問題の解決のために援助者つまり、日常生活の中に見つからなかった‘不在の対象’—を求めて現れる。そこで、セラピストがもし何らかの援助ができるならそこに居場所を得て、二人でクライアントの問題を解決するための何らかの作業をする。その作業によって、クライアントの「私」の中に何かが生みだされつつ、それをもとに、問題を解決し、援助者と分離し、治療関係から離れていく。さらに、このような過程からは、「不在」のテーマ、その次に「私」の形成のテーマ、そして最後に「対象喪失」のテーマとなる一連のテーマを抽出することができる。そのようなテーマの連なりは古事記上巻(岩橋, 2013a:2013b:2013c)やエディプス神話のストーリーの中からも抽出できる。それらを簡単にまとめると次のようになる。古事記上巻においてもエディプス神話においても、‘不在の対象’を求めて放浪した後、居場所を得て結婚する。居場所を得ると第三者から嫉

妬されるというテーマが続き、対立構造の中を生きるストーリーとなる。そこでは、母親であったり、妻であったり、妹であったりする巫女的女性からの助力を得て、「あわせ」(松岡, 2008) てもらいながらそれらのテーマに取り組む。その結果、古事記の主人公は、そのテーマをこなし、良い対象によって援助されながら、他者の間を渡っていきける「私」を形成し、別の場所に生き延び渡ってゆく。しかし、エディプスの場合は、“すでに決まっている運命は不可知であるからどのような可能性も否定できず、現実の中で起こるすべての出来事は偶然にすぎないと考えてもよい”というテューケーの哲学(Steiner, 1993)を妻であり母親であるイオカステとの間で共有する。その二人の間で生まれる思考の特徴は、全体の中の一つの部分を選択し、それへの視点をよい対象と共有して、それ以外を見ようとしないことである。その思考によって現実を否認し、イオカステのもとに留まり、別の場所に渡っていけない。最後の対象喪失のテーマでは、古事記の主人公は巫女的女性と自分が異なる存在(異類性)であることを認識して分離し、巫女的女性を心の中によい対象

* 福岡県立大学大学院 人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

として取り入れて内在化する。それに対してエディプス神話では、イオカステは自殺する。そして、“不可知な運命はすべてがはじめから決まっているのだから、どのように現実に関与したとしてもすべての出来事は必然的に起こることである”というダイモーンの哲学(岩橋,2010)による思考—悪い対象と全体の意味を共有し、それによってすべての部分を意味づけようとする思考—に支配されて、現実を否認し、悪い対象と同一化し、自らの両目をつく。このように古事記がそれぞれのテーマを乗り越えていくのに対して、エディプス神話では失敗する。古事記とエディプス神話を比較すると、結果は異なるが、同じテーマの連なりによって構成されている(岩橋,2013c)。

‘不在の対象’に出会い、その対象がよい対象であり、その対象との交流によって私(自己)の中に何かを生みだし、対象が異なることを認識し分離してゆくという、これらのテーマの連なりは、巨視的に見るとこのように神話のストーリーの中や一つの心理療法過程の中にも見出すことができる。また、微視的に見ると、一回の面接の中にも、さらにはその一回の面接の中のひとつの出会い・触れ合いの中にも見ることができるであろう。

ところで、精神分析的な心理療法の場合では、そのような交流によって生み出されるものとして期待されるのは、クライエントの内的世界の変化であろう。そして、その変化が起こるためには、上述した過程において、まず、不在であったよい対象に出会わなければならない。そのためにはセラピストをよい対象として認識し、交流し、よい対象として取り入れ、同一化し、よい内的対象への確信を強め、自己を豊かにして、それと異なることを認識し分離してゆかなければならない。

この論文の目的は、‘不在の対象’に出会って、よい対象と認識して、それを取り入れて同一化してよい対象を内在化しゆくことから始まり、よい自己(私)を形成し、それを確信してゆく一連の過程を、促進し妨害する要因について検討することである。その際に、その要因として、Klein派の精神分析家たちが発展させてきた概念の中から、特に同一化の前提条件、対象の不在に対する防衛、 α 機能、羨望、病理構造体、結合対象の諸概念を取り上げて概観し、その過程に影響を与える要因という観点から、それらの概念およびその概念間の関連についてKlein派の文献を通して検討する。

II. よい自己の萌芽

—よい対象との共通基盤を生成する原初的な愛情関係—

Klein(1955)は、自己部分が、いかに投影同一化され、またその部分が自己に戻ってきて統合されていくのかということに関心を向けている。具体的にはGreen(1950)の小説「私があなたなら」を題材に、次のことを考察している。分裂され投影された自己部分と背後に残った部分の関係や自ら投影する対象の選択の基礎となる動因、投影された自己部分が対象の中に深く潜行し、対象を支配するプロセスである。そして、その中で、以下のように述べている。

他者と強く同一化するためには、その対象との共通基盤が十分に自己のうちに存在していると感じることが重要である。ファビアン(主人公の名前;筆者注)は、そのよい自己を失ってしまっているようにみえるから、きわめてよい対象との同一化に必要なよいものが彼の中に十分にあるようには、彼には感じられなかった。

このように、Kleinは、よい対象の取り入れ同一化の前提条件の一つとして、よい対象との共通基盤であるよい自己を自らの内に感じていることをあげている。よい自己とは「よい対象と愛情関係にあると感じられている人格部分」である。それではよい自己、つまり、よい対象との愛情関係にあると感じられることとは、どのように成立するのであろうか。同論文の中に次の文章がある。

内在化されたよい乳房は、よい感情がそこから外的対象に投射(project)されるところの自我内の焦点として、作用する。それは自我を強化し分裂と分散の過程に拮抗して、統合と総合の能力を高める。内在化されたよい対象は、このようにして統合された安定した自我にとっての、またよい対象関係にとっての前提条件の一つである。

内在化されたよい対象が前提条件となって、それを外界対象に投影し、取り入れることでよい対象への確信は強化され、自我の統合する能力を高めていくことが示されている。これは、よい対象に対する確信の重要性とその確立について、Kleinが繰り返し強調する基本的な考え方である。内在化されたよい対象こそ、よい対象の外的対象への投影と取り入れという、外的対象とのよい循環を通して、自我の統合能力を高める

要である。しかし、そうすると、よい対象の取り入れ同一化のためには、よい自己を感じる事が前提条件としてあったのではないかと疑問が生じる。この文章では、自己という用語は用いられていない。自己と呼べるほどのまとまりとしての認識ははまだ存在しないためであろう。しかし、このようなよい循環の中で、よい対象との愛情関係のうちにあるよい感情を感じている人格部分がよい自己の萌芽であろう。

さらにまた同じ論文で、Kleinは、次のように述べる。

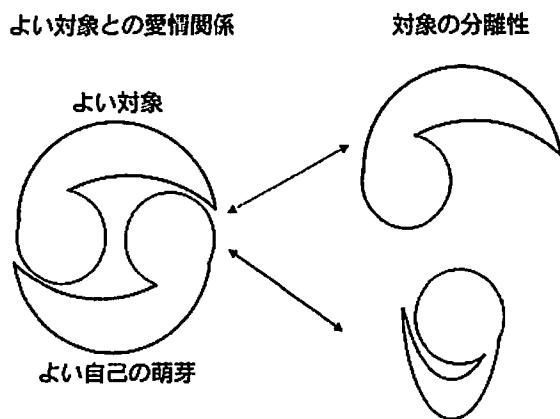
しっかりと確立したよい対象はその対象へのしっかりと愛情を含むが (a securely established good object, implying a securely established love for it), それは自我に富と豊かさの感情を与え、そのため枯渇感なしにリビドーの流出 (outpouring) と外界への自己のよい部分の投射 (project) を可能にする。…自我はそのとき同時に自分が放出した愛情を再び取り入れることができ、それと並んで他の源泉からよいものを取り入れることができると感じ、このようにして、その全過程によって豊かにされると感じる。

訳者は、よい対象への愛情をその対象が「含む」と訳しているがそれでは誤解を引き起こすように思われる。よい対象にはよい感情が「伴う」のであり、よい対象への愛情そのものやそれを感じている部分がよい自己の萌芽である。さらに、そのようなよい自己の萌芽を自我のうちに感じることで、枯渇感なしにリビドーを外に向け、自己のよい部分を外的対象に project でき、また他の源泉つまり、外的対象から新たによいものを取り入れることができるということを Klein のこの記述は示している。ところで上記引用部分で訳者は、project を投影ではなく投射と訳している。project に対してその訳語を使用しているのは、この論文の中で上に引用した2箇所の部分だけである。そのようにした理由を推測するに、引用した部分の文脈では、project した側にも、されたものと同じよいものが残っており、project したよい自己の側が枯渇せず変わらずよいままでいることを示そうとして、排泄し分裂排除するというイメージが強い投影という言葉ではない訳語を使ったのではないだろうか。

以上をまとめると、よい対象により感情を抱き、自らも枯渇することなくよい対象に愛情を向けることができるという愛情関係にあると感じることが、未だ自己というまとまりの認識はないであろうが、よい自己の萌芽を実感することである。それを感じるごとと、

よい完全な (good and complete) 対象が取り入れられ、内在化されることは同時に起こることである。つまり、よい対象の取り入れ同一化と、その前提条件であるよい対象との共通基盤が自分の中にあると感じることとは、原初的な愛情関係の中での体験の2つの側面として考えられる。しかし、よい感情というよい自己の萌芽が、よい自己となっていくためには、まず自己というまとまりの認識が必要である。さらに自分自身の中に起こるよい感情が、よい自己となるためには、そのよい感情が枯渇感なしに対象に投影されることが必要である。

Klein の記述には明記されていないが、「他の源泉からよいものを取り入れることができると感じ」ということから推測すると、自らの快感が対象にとってもよいものであると認識することによって、よいものがさらに行き交うことが想定されている。そのような状況は、哺乳時の乳児の満足に触れて、母親が喜びを感じる時、起こっている状況であろう。その時、母親は母乳や愛情を与えると同時に、喜びを与えられている。乳児もまた、母乳や愛情を与えられると同時に、自らがよい感情を持つことで、それが母親に喜びを与えることと一つになっている。与えるという意識は未だないにせよ、乳児にはよい感情でいることとそれが対象により感情を引き起こすものを与えることが、同時に起こっているのである。その関係性は、互いに愛情を与え、与えられる関係性の母胎である。後に自己というまとまりの認識がより明確になり、自己が対象によりものを“与える”体験の母胎である。IVで後述する Bion(1962)のうつわ (container) と中身 (contained) や夢想 (reverie) の理論も考慮すると、互いに相手からの愛情にとってのうつわであり、互いのうつわに愛情を与える中身となる。それを図式化すると図1のように表現できるであろう。しかし、この体験は対象の分離性による対象の不在によってたやすく失われる。それゆえに、対象の不在とともによい自己というよい対象との共通基盤も失われかねない。実際に、乳児と母親の哺乳体験のように、与え与えられる行き交う愛情に関して、ほぼ完全なシンメトリーのような美しく素晴らしい関係に匹敵する体験は、その後の人生において得られないのかもしれない。しかし、このような関係性を母胎としてよい自己という共通基盤は生成されるのであろう。そして、よい対象とそのような愛情関係に入れるという確信がよい自己についての確信であり、共通基盤への確信であろう (図1)。



(注)

- ・よい対象との愛情関係においては、互いに愛情を与え、与えられる。
- ・互いに相手から与えられるもののうつわ (container) となり、また、相手に与える中身 (contained) となるので、うつわであり中身であることを示すために、よい対象やよい自己の萌芽を勾玉の形で表現した。
- ・よい対象と分離しているよい自己の萌芽は、自身の中身を自身のうつわで抱えている、という意味でこのような形で表現した。

図1 外界の現実の中でよい対象との間で起こる愛情関係と対象の分離性

III. よい対象の不在が引き起こす解体への傾向とそれへの防衛

一失われるよい対象との共通基盤(1)一

IIで述べたような、最初のよい完全な対象であるよい乳房を持っているという感情とよい完全な乳房についての確信は、対象の不在によって必然的に起こる欲求不満と不安で揺るがされる。IIIからは、よい対象との共通基盤が失われ、また、取り戻されるいくつかの要因について、Klein派の概念をまとめながら検討する。

Klein (1946) によると、欲求不満と不安の中で、乳児には、口愛的サディズム的食人的願望によって、空想の中で、欲求不満を引き起こす乳房を粉々にして取り入れたように、また、攻撃を加えて断片化したように感じられる。その一方で、満足を与えてくれる乳房は取り入れられて、IIで述べたように、よい乳房として自我の焦点として働く。よい乳房と悪い乳房とに分裂させて、よい乳房を守ろうとするのである。そのような防衛を基礎に、迫害的で悪い乳房への恐怖に対する保護手段として、また際限のない満足を目指して、よい乳房の理想化が起こる。そして、乳児は幻覚的な満足を求めて、理想的な対象と状況とを万能的に作り出そうとし、悪い迫害的な対象と苦痛な状況の存在に対して万能的に否認し、絶滅させようとする。しかし、

欲求不満と不安で揺さぶられると、その結果、よい乳房と欲求不満を引き起こす悪い乳房を分裂し分離したままにしていること—その分裂は、よい乳房への確信を維持するために必要であるが—が困難になり、よい乳房もまた、よい完全な対象のままではなく、断片化しているように感じられる。このように、分裂と理想化、否認の防衛を使って、できるだけ、よい完全な乳房を維持しようとするが、維持できない場合、断片化によってよい乳房への確信が損なわれ、自我も断片化する。欲求不満を引き起こす悪い乳房へと向かっていた攻撃は、さらに母親の身体に対する、次の2つの攻撃に発展する。1つは、母親の身体の中にある内容を吸いつくし、噛み砕き、えぐり、奪い取るといった口愛衝動が顕著な攻撃と、もう1つは、危険物 (排泄物) を自分の中から追い出し、母親の中へと追いやろうとする肛門的および尿道的衝動が顕著な攻撃である。

後者は、自己の一部を母親の中に排泄し、自己の一部を含み持つゆえに、母親を分離した個体として感じられず、むしろ悪い自己として感じられ、それに憎悪を向けるという同一化の形態、つまり投影同一化の過程である。そのようにして自己の一部に対する憎悪は、母親へと向けられる。また自己の憎むべき部分を対象と同一化し追放することは、自我を脆弱にもさせる (図2(4))。

投影同一化については、よい感情やよい自己部分を母親の中に投影し、よい対象関係を発展させる場合もある。それによってよい対象関係を発展させようとすることは自我を統合しようとする能力に本質的なものである。しかし、投影過程が過剰に進められる場合は、人格のよい部分が失われたように感じられ、よい部分が投影された母親は自我理想と感じられる。その場合も自我を脆弱にし、投影する側の自己は枯渇感を体験することになる (図2(2)(3))。

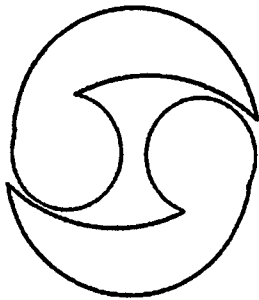
悪い自己であれよい自己であれ、投影が過剰であれば自我は脆弱化する。さらに、取り入れに対しても影響する。もし投影同一化によって、自己の一部が対象の中に強引に進入して対象の支配を行う場合は、その結果として、取り入れは暴力的な投影の報復として、外部から内部に強力に侵入してくるよう感じられ、それによって支配されるように感じられる。その結果、内的世界への過剰なひきこもりを引き起こし、外的世界の取り入れからだけでなく、内的世界でも、内的な迫害者から理想化された内的対象への逃避が生じる。しかし、その逃避が過剰になると、自我は「殻 (shell)」に過ぎない内的対象に、ひたすら追従し依存している

対象との同一化を創造的に機能させる基盤としての結合対象へ—よい対象との失われた共通基盤を求めて—

ように感じられ、自分は、生命も無く、価値も無いと感じられるようになる。Kleinは、Heimann (1942)が使用した「同化」という概念を導入し、対象を自我に同化しきれないままの理想化した内的対象に逃避した場合は、自我内の分裂もさらに進むという。というのは、自我の一部はその理想化した対象と結びつこうとし、別の部分は、内的な迫害に対処しようとするからである(図2の(3)、(4)が並存し、自我は分裂したままになる)。

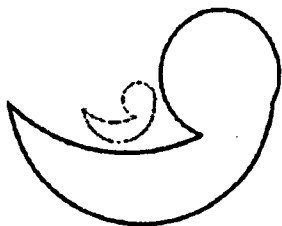
このように、死の本能に基づく、解体への傾向によって、よい対象は断片化の危機にみまわれ、よさの確信が損なわれる。よい対象を理想化し、悪い対象を否認する防衛、さらに、悪い自己部分を対象に投影同一化する防衛がとられるが、対象からの報復を恐れて、内的世界やそこでの理想化対象に逃避する傾向へと向かわせる。また、よい自己部分を対象に投影した場合も、よい自己部分は枯渇してゆくように感じる。もし、外界のよい対象との愛情関係を体験できないなら、このようにして、よい対象との間で愛情を与えられ、与えていたよい自己の萌芽は感じられなくなり、よい対象との共通基盤は失われる方向に向かう。内的世界における理想化や投影同一化、よい対象との愛情関係の状況を比較するために、それらの状況を図1で用いたイメージをもとに、図式化してみる(図2)。

(1)内在化したよい対象



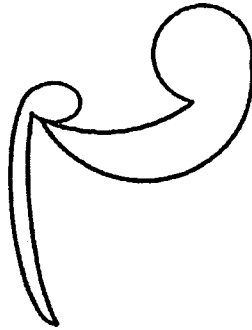
(注)
・外界の愛情関係がそのまま内在化されている。

(2)理想化した対象



(注)
・与え、与えられる関係になく、対象によいものを与え、対象は理想化されていく。
・理想化した対象によって保護されている。
・(1)から(2)さらに、外界のよい対象との愛情関係を得て(1)に戻るなら、よい対象への確信は強化される。理想化が過度になると(3)へ。

(3)理想化した対象(過度の投影)



(注)
・自己は枯渇してゆく

(4)投影同一化した対象

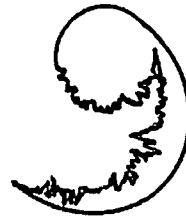


(注)
・対象は自己の一部として認識される。自己と対象は混乱してゆく。
・外界のよい対象との愛情関係を得て(1)に戻るなら、よい対象への確信は強化される。
・過度な投影の場合、自己は枯渇してゆく。

過度な投影の場合



(5)混乱した対象



(注)
・断片化して取り入れられ、よいと悪いが混乱している。

図2 内的対象と自己との関係

IV. α機能

—よい対象との共通基盤の回復と強化—

上述した投影同一化の概念は、その後、Klein派精神分析家たちによって展開してゆく。その中で、Bion (1962)は、投影同一化をコミュニケーションの様式と捉え、治療関係での相互作用モデルを提唱したが、それも上述したような母子相互作用をモデルとしている。それは、図2の(4)から(1)に戻る過程の綿密な探索によるモデルである。

Bion (1962:1963)によると、飢餓感などの欲求不満の体験によって乳児に生じる対処できない感覚

(β 要素)は、乳児にとっては排除するしか術が無く、その感覚やそれを感じている自己の断片は、投影される。つまり、投影同一化である。 β 要素は破局の感覚で結合されたパーソナリティの諸側面の混ざった対象でもある。母親の乳房はそれらのうつわ (container) となり、母親は乳児に何が起っているのかを理解し、哺乳が始まる。そもそも悪い乳房とは、乳房に対する満たされない欲求とその感情である。欲求不満の状態から哺乳が始まると、母乳とよい乳房の取り入れが始まるが、乳児にはその取り入れと悪い乳房のうつわへの排泄との区別はつかない。哺乳によってついに、対処できない感覚や自己の断片が投影されていた悪い乳房という情動経験が、よい感情を伴うよい乳房という情動経験に転換する。この一連の哺乳経験は、哺乳体験についての苦痛な感覚 (β 要素)の排泄から、満たされ自らの中に貯蔵し、想起できる感覚 (α 要素)の取り入れとして収まっていく。このよい乳房のうつわの機能をBionは α 機能と名づけた。このような自らの中に貯蔵される α 要素は、欲求不満と苦痛な感覚の排泄に始まり満足に至る一連の、何度も繰り返される哺乳体験について何が起っているのかを思考し、個々の経験から抽象化することに利用できる。特に、不在の乳房とそれによる欲求不満一言い換えると、よい対象との分離性—をめぐる思考に利用できるものとなる。

またBionは、この哺乳体験での α 機能の因子として夢想 (reverie) をあげている。母親が乳児を愛するときに、哺乳という身体的通路以外に、母親は夢想によって愛情を表現しているという。夢想とは「夢想する者が愛している対象に由来するどことなく対象」をも自由に受け取る心の状態であり、だから乳児が良く感じても悪く感じてもその投影同一化を受け入れることができる」心の状態のことである。このような夢想が乳児に伝達される。夢想は愛情の表現であり、乳児がよい乳房の不在とそれによる欲求不満に耐え、その現実について思考するのを支えるのである。

Bionは、母親と乳児の関係をモデルとして、うつわ (container) と中身 (contained) という用語を使って、乳児にうつわが生成されていく様子を説明している。うつわは♀、中身は♂として抽象化され記号化される。その♀、♂という対象間の結合に内在する情動体験として、Bionは、愛情 (L)、憎悪 (H) と知りつつある状態にあること (K) を挙げた。Kにおいては、LとHは因子であって、Kに従属するものである。Kは本質

的には、2つの対象の機能であるが、♂♀という結合したものの機能とみなすことができる。Kでは、♂と♀とが互いに共生している。共生的関係においては、♂と♀が互いに共通の利益のために、互いを傷つけずに依存している。つまり、母親は経験から利益を得て精神的に成長し、乳児も同じく利益を引き出し、成長する。この二人の活動は、乳児によって取り入れられるようになり、その結果♂♀の装置が、 α 機能の一部として乳児の中に設置される。Bionのいう共生的関係は、よい対象との共通基盤を生成する愛情関係 (Klein,1955) と同じ関係と理解できるであろう。

また、♂♀として記号化している表現は、男性と番つて女性がその間に子どもを創造することと、よい対象と対になって愛情を交わしあっている自己がその間に何かを創造することを重ねているのである。そして、Bionが想定している、♂♀によって創造される何かとは、対象や現実についての思考である。Bion (1963) は、思考の生成段階 (A~H) を示したが、その中のDの前概念作用 (pre-conception) は期待の状態にある♀である。それと適切な感覚印象—これは♂である—が対をなすことで、Eの概念作用 (conception) —これは♂♀である—が生じる。Bionは、概念作用を「定数を代入された変数とみなせる」と述べているように、それは感覚印象との結合による前概念作用の現実化である。そして、その現実の中で、期待についての何らかの実感を得る。さらに、それがFの概念 (concept) となり、思考が生成されていく。

半井 (2011) は、このような記号化 (♂♀) では、両親間の結びつきと親子間の結びつきの相違を明確にしていけないが、その相違は決定的に重要であると述べている。確かにそのとおりである。しかし、異なる存在 (男女、親子、自己と対象、ある自己部分とそれとは異なる自己部分…) がうつわになり中身になりあうことで、何かを創造するというこの本質をこの記号化ほど表現する記号は他にないように筆者には思える。

ここで再び、母親と乳児の関係に戻ってまとめてみると、哺乳の状況において、乳児は、飢餓感などの感覚を母親に投影しながら、母乳を得ており、そこにまた感覚印象が伴っている。その状況において、Kの結合状態になるならば、母親は乳児の飢餓感などの♂の♀となると同時に、乳児は母親からやってくる母乳や夢想により伝わる愛情の♀となっているのである。そしてそれぞれがそれぞれを成長させる。乳児の中に生成され、成長する♀は、Klein (1955) の中でよい対象との共通基盤として挙げたよい自己の萌芽と等価で

ある。Kにおいては、よい対象(♂)のうつわとしての自己(♀)—よい対象との共通基盤としてのよい自己—の萌芽が乳児の中で体験され、生成されはじめるというよいであろう。

V. 羨望によるよい対象との愛情関係の破壊—失われるよい対象との共通基盤(2)—

Klein (1957) は晩年に羨望についてまとめている。それによると羨望は「自分以外の人が何かのぞましいものをわがものとしていて、それを楽しんでいることへの怒りの感情であり—羨望—による衝動は、それを奪い取るか、そこなってしまうことにある」としている。このような定義からすると、羨望を感じるということは、全体的なまとまりのある自己という概念がある程度認識されていることを示している。そして、乳児によって母親にむけられる羨望は、母親、とりわけ母親の乳房の内部に、主に悪い排泄物や自己の部分などの悪しきものを突っ込むことで、母親の創造性を破壊しようとするものである。このように羨望は、Klein (1955) が「よい対象との愛情関係」といい、Bion (1962) が「共生的関係」として記述した母子の関係性を妨げる情動である。認識としてまとまりのある自己の概念が生成されてくることで、よい対象との共通基盤は、対象の分離性以外の、自己と対象との比較とその時の情動—羨望—によっても脅かされることとなる。

Klein (1957) が、羨望の破壊的側面として強調しているのは、よい対象からもたらされるものに対して、心からの確信を持って受け入れ、同化することができなくなることである。羨望が強いと、羨望によって傷つけてしまったという感情やそのために生じる不安によって、「対象のよさへの確信」が乏しくなる。それがまた、食欲さと破壊衝動を増大させる。そのような状況では、よい対象との間での「楽しむ能力」も損なわれる。Kleinは、授乳されているときの喜び、楽しさは、幸福感の基礎であり、自分以外の人間との一体感を可能にし、その一体性は「自分が十分に理解されている」ことを意味しており、感謝という情緒の基礎となるものであるという。そしてその感謝が、よい対象への信頼へとつながる。このようによい対象が確立すると、よい対象は自己を守ってくれるものになるとともに、自己によって愛され守られるものになり、このことが自分自身のよさへの信頼の基礎となるという。Kleinのこのような記述は、IIで示した「よい対象との愛情関係」そのものである。自己という認識が明確に

なることで生じる羨望は、このような相互に愛情が行き交う「よい対象との愛情関係」と内的な豊かさをもたらすよい対象の同化を阻むのである。

Kleinは、さらに羨望がどのように破壊的に機能するかを次のようにあげている。

自我が乳房をよい対象と悪い対象に分裂させるのは、自身とよい対象を破壊性から守る重要なプロセスであるが、羨望はそれを妨げ、対象の貪欲な内在化に向かわせ、自我自身と対象との断片化につながる。つまり、IIIで述べた断片化の傾向を促進する。

また、羨望や破壊衝動や被害的な不安が非常に強い場合は、これらの情緒に対する防衛として理想化が使用される。羨望はIIIで述べた理想化についても危険な方向に進めるように働く。このような理想化は、貪欲に、至るところで最上のものを手に入れようとする見さかない同一化という方向に向かわせる。この欲求は対象の選択と識別の能力を妨げ、よいものと悪いものとの混乱につながる。このような情緒に対する防衛としての理想化は、よい対象と悪い対象の最初の分裂とそれらを統合してゆく過程を妨げ、よい対象との同一化を阻み、自身のうちによりものをもっているというよい自己感情の獲得を得にくくさせるのである。また、このような理想化対象は迫害的な対象へと切り替わる。

過度の羨望の結果として、Kleinは罪悪感が早くから芽生える問題も指摘している。罪悪感に耐えるだけの能力をもっていない自我には、罪悪感には迫害感として感じられ、罪悪感をもたらず対象は迫害的对象へと変わってしまう。そのために、抑うつ不安と被害的不安は混同され、抑うつポジションの通過を妨げる。Kleinは、「罪悪感のもっとも深層の諸源泉の一つは、通常、哺乳してくれる乳房への羨望と乳房の良さを羨望に満ちた攻撃で損なってしまったという感情とに結びついている」とまで述べ、羨望と罪悪感の関係に注目している。

また、Kleinは、羨望を最初の羨望と後期の羨望に分けている。最初の羨望は、これまで述べてきたように、母親の乳房へと向かう羨望である。後期の羨望は、もはや乳房だけに集中しているのではなく、父親のペニスを受け入れ、体内に子どもをもち、その子どもを生み、哺乳することのできる母親に対して集中する。つまり、Kleinがエディプス・コンプレックスの初期段階に現れる結合両親像 (Klein, 1932) として指摘した結合対象に向けられた羨望である。結合両親像についての空想は、両親は互いに相手から絶えず満足を

得ているのではないかと疑い、絶えず結合しているのだというものである。これは、両親を区別し、両親のそれぞれとの間でよい関係を確立する能力を妨げる。父親との関係を母親との関係から解放する能力が欠如することで、両親双方との関係を混乱させ障害する。この結合両親像の影響力の程度は、羨望の強さ、エディプス的な嫉妬の激しさによって左右される。

Klein (1957) における羨望の記述をみると、Klein は羨望がⅢで述べた防衛を危険な方向に進めたり、防衛を機能させなくさせることで、よい対象への確信を蝕み、よいものと悪いもの、罪悪感と迫害感、両親双方との関係性などの混乱を招き、それらの識別を妨げるものとして捉えていることがわかる。Klein の流れを汲む精神分析家にとっては、羨望による混乱への対処が大きなテーマとなる。

Bion (1962) も、羨望の破壊性について触れている。すでに前節で、Kにおける♀と♂の間の共生的関係について触れたが、Bionは、♀と♂の関係における情動が羨望である時、その羨望を-Kと表記している。-Kにおける-♀は、♂のあらゆるよいものを羨望によって剥ぎとり、-♀と-♂は「無へと変質してゆく空虚な優位性-劣位性しか表わさなくなる」という。-♂♀の特色は「欠如性」であって、それは、Bionによると、全く道徳を欠いている羨望に満ちた道徳優位性の主張である。-(♂♀)は全てに欠点を発見して優位性を主張する優位な対象として現れ、パーソナリティの中のどんな新しい発達に対しても憎悪を向け、-(♂♀)にとっては「新しい発達が破壊されるべき競争相手であるかのよう」になる。このような在り方によって、-(♂♀)は、Kleinが早くから芽生えた罪悪感と表現した罪悪感を喚起し、道徳的な優位性と学ばない能力の優位性を主張する。

Bionは、このような-(♂♀)を乳児が死にそうな恐怖を感じている情動的状况をモデルとして次のように説明している。乳児は恐怖感を分裂排除して、平静な乳房に対する羨望を憎悪とともに乳房へ投影する。羨望が投影された乳房は、死の恐怖の中からよいあるいは価値のある要素を羨望して取り除き、価値のない残遺物を乳児の中に押し戻すと感じられる。これは死の恐怖よりもはるかに多くのもの、実質的にはパーソナリティ全体の排出をしたかのようになる。Bionは、この剥ぎ取り過程の深刻さを、例えば死ぬ恐怖が起きる前に必要な生きる意志さえも、羨望的な乳房によってよさの一部として取り除かれると表現している。

このようにBionは、羨望を愛情によってよいもの

を与えられ、与える関係性から、相手からよいものを奪いあう関係性へ、成長しあう関係性から優位性を主張し合う関係性へ変化させる情動として捉えているのである。このような羨望は、よい対象との共通基盤を根本から破壊することを示している。

ところで、Bionにとっては、よい対象に対する愛情が羨望の対極にあるのではなく、羨望の対極はKつまり“知りつつある状態にあること”である。Bion (1962) は、愛情と羨望について次のように述べている。

乳児や母親或いは両者にある愛情は、妨害を減らさずむしろ増大させる。理由の一部には、愛情は余りに愛している対象に対する羨望から切り離せないからであり、また一部には排除された第三の対象の羨望と嫉妬を引き起こすように感じられるからである。愛情が存在しなければ憎悪は存在しないのだが、愛情が果たす役割は、羨望や競争・憎悪によって覆い隠されて注目されないかもしれない。情動の激しさ (violence) は、妨害を増強させる。その激しさが、破壊性およびそれに続く罪悪感・抑うつから区別されないからである。

ここには、激しい愛情は必然的に羨望につながるということが述べられている。治療関係においても、治療者からクライアントへの愛情とクライアントから治療者の愛情では、どちらが強いのかという比較が起こる。これは、治療者の内側での自分の存在についての問いをめぐって、よく起こる比較である。羨望がそれを強化する。しかし、知ることは、相手をさらに知ることであり、自分とは違ってそこでそのように生きている独自の相手を知ろうとする方向に意識が向かう。知る能力という創造性に対する羨望もあるが、対象を知ることそのものは、その対象の自分とは異なる独自の部分やその意味に向かうことであり、量的な比較に向かうのではなく、独自の対象に向かうように思われる。知ることは、自分と同じでありながらも異なることも分かること、さらには、異なる部分は分からないことも認めながら、分からないことを抱えながらも分かろうとさらに対象に近づこうとすることと行っていいのであろう。BionによるとそのようなKが、羨望-対象の意味を剥ぎ取り、優位-劣位しか表さない関係性にするこゝの対極にある情動なのである。そして、このようなKは、互いに異なることを認めながら、共生し、共に成長しあう互いにとってよいものであるという共通基盤を見出そうとしている情動のように思われる。

VI. よい対象の分離性とその帰結としての羨望に対する病理構造体

一よい対象との共通基盤の欠如への自己愛による対処—
Klein派精神分析家たちは、パーソナリティのさまざまな病理を探求する中で、臨床現象を整理するために病理構造体という概念を発展させてきた。しかし、あらためて、Klein (1946:1957) を読んでみると、投影同一化や内的対象の理想化とそこへの逃避とそれへの追従、よいものと悪いものが識別できなくなる混乱などは、自己愛という視点はうすいように感じられるものの、自己愛構造体や病理構造体として後に概念化されてゆく組織的な防衛を、すでにKleinが十分に観察していたようにさえ筆者には思われる。Klein派精神分析家たちはそれらをさらに観察し発展させたのであろう。その際に、Spillius (1988) が概観しているように、その病理構造体という考えは、2つの思考の流れにそって発展した。1つ目の流れは、「人格の残りの部分に対して悪い自己が優勢なこと」である。悪い自己とそれ以外の人格部分との間の関係には倒錯的暗癖的要素があり、サド-マソヒズム的な関係にあるという考えである。筆者は、これはよいものと悪いものの混乱の悪用一言い換えると、あるバランスを維持するために防衛的に“混乱”を使用することともいえると思う。2つ目の流れは、「妄想-分裂態勢と抑うつ態勢との間の人格のどこかに根ざしている衝動、不安、防衛の構成されたひとつのパターンの発達」という考えである。このパターンを構成する病理構造体によって、人は不安定ながら強力にあるバランスを維持し、妄想-分裂態勢の混沌から守られるが、しかし、抑うつ態勢に備わっている苦痛に直面することを避け、抑うつ態勢を通過することを阻害する。つまり、この構造体は、進歩に向かって変化することに激しく抵抗する。このような病理構造体には、自己愛が関与しており、また、病理構造体は、死の本能の表出であると同時にそれへの防衛の組織化である、というのがKlein派精神分析家たちの見解である (Spillius, 1988)。Spillius (1988) によると、Klein派精神分析家たちは、病理構造体を探求する中で、自我が、Vで示したような「羨望が投影された乳房」を取り入れ、道徳的優越性を主張する羨望に充ちた内的対象に部分的に同一化してできた、自己愛的で破壊的な悪い自己が、さまざまな方法で内的世界を統治する様子を明らかにしようとした。その点で、Spilliusは、病理構造体において悪い自己が残りの自己部分を支配するという考えは、Bionの-Kについての研究が基礎となっていると捉え

ている。

Rosenfeld (1971) は、自己愛への注目によって病理構造体の解明について多大な貢献をした。Rosenfeldは、自己愛がいかにか自己と対象との分離性、分離性を認識することによる依存感、依存感により刺激される羨望を防衛してゆくかを描写し、自己愛によって組織化された防衛としての病理構造体を提示した。

Rosenfeldは、自己愛はリビド一面と破壊面に分けて理解することが必要であるが、自己愛はリビド一面、破壊面のいずれにせよ、自己の理想化を通して、対象との分離性、依存感、羨望を防衛すると述べた。リビド一的な側面においては、自己理想化はよい対象群やそれらの特質の万能的な取り入れ同一化と投影同一化によって維持される。自己愛者はそのような同一化によって外界対象群や外界とつながり、価値あるものはすべて彼の一部であるか、彼が万能的に支配していると感じる。破壊的な側面においては、自己の破壊的部分を理想化し、理想化された破壊的部分は、陽性のリビド一的対象関係や対象を必要と感じて、それに依存したい願望を体験している自己のリビド一部分に破壊性を向ける。そして自己の破壊的部分は、依存的対象関係を妨げ、外界対象群を永久に脱価値化させる。ほとんどの自己愛者にはリビド一面と破壊面の両面が存在している。リビド一面が支配している自己愛状態において、自分から分離していると知覚される対象との接触つまり対象の分離性の認識一によって万能的自己理想化が脅かされるやいなや、破壊性が表面に現れてくる。自己の理想化が脅かされるということは、自己愛者にとっては、自分自身の創造力に帰していた貴重な特質は、現実には外界対象の特性であると暴露され、辱められ、打ち負かされたと感じることである。それに伴う激しい怒りや復讐心が起こるがそれらが和らぎ、貴重なよい特質を含んだ外的対象が自覚されると羨望が引き起こされる。その羨望は生命やよさの真の源である対象を破壊したい願望として現れる。また、自己破壊としても現れる。羨望による苦痛を回避するために、自己全体が、理想化されている破壊的自己部分に一時的に同一化し、両親や分析家によって表象されている生命や創造性に対して破壊性を向けて勝利を得ようとする。また、子どもの部分として体験される依存的なりビド一的自己部分に対しても支配、あるいは破壊して、優越性を示そうとする。このような破壊的自己愛的な病理構造体にとっては、変わることや援助を受けることは悪いことや失敗として体験される。ここでの破壊活動は倒錯と結びつき、その破壊的な力

は、攻撃的な本能が性愛化されることによって、はるかに強められたものとなる。

Meltzer (1973) は、暴君的な悪い自己が依存的自己部分を倒錯的に支配する様子を記述している。Meltzerによると、内的母親とその赤ん坊に対する攻撃によって死んだ対象群は、戦慄 (terror) という妄想性不安を引き起こす。それに対して、内的で創造的な結合両親の償い能力が、その死んだ対象群を回復させるという。しかし、その内的対象の能力への乳幼児的依存が、エディプス的な嫉妬や破壊的の羨望によって妨げられると、依存的自己部分は、万能的で破壊的な悪い自己部分へ服従する。というのは、それが戦慄からの保護を与えるように感じられるからである。そこに依存的自己部分と万能的で破壊的な自己部分との間に倒錯的で嗜癖的な関係が生まれる。暴君的な悪い自己部分は、迫害者のように振舞い、恐怖されるが、戦慄への保護が失われる恐怖によって、悪い自己部分との嗜癖的な関係は維持されることとなる。

このようにして、病理構造体は外的対象との分離性、依存感、羨望に対して防衛的に働く。そして、これには、自己愛が深く関与している。羨望や自己愛が芽生え始めることは、自己という概念が意識され始めることと、それにより自己と対象が比較され始めることが関係しているであろう。生命の源である外界からやってくるよい対象の分離性、またそれに依存せざるをえないことに対して、自己は、その関係性を逆転させて、自己理想化によって、自己を対象に対して優位に位置づけようとする。自己理想化によって、よい対象を自らが所有している、または自らがその対象であると意識することで、また、破壊的で強い自己を理想化し、依存的自己部分を保護しながら支配することで、よい対象に対して優位に立っているという意識を維持できるのである。そうすることで、よい対象との愛情関係をもつことができない苦痛やその愛情関係に必然的に伴う対象の分離性に関する苦痛を回避する防衛的な手段が病理構造体である。これは、よい対象との共通基盤を見失ったがゆえに、よい対象ではなく自己を理想化してそれに依存するという手段であり、その手段をとる限り、よい対象との共通基盤は見出すことを困難にする。自己理想化によるこのような状況を図式化してみる (図3)。

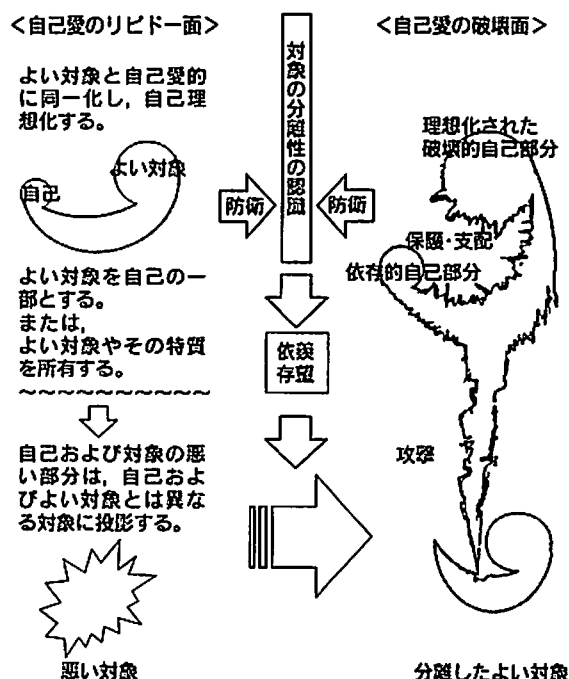


図3 自己愛のリビド一面と破壊面

VII. 結合対象

—羨望のうつつから異なる対象との創造的な結合のためのうつつへ—

生命の源であるよい対象の分離性、それへの依存感、それにより引き起こされる羨望とそれらによる苦痛が自己愛的な自己理想化によって防衛されるとしても、分離と依存、そして羨望は感じざるを得ない。というのは、対象と自己とは異なるのであり、分離しているというのが現実だからである。そして、それらを強烈に感じさせる対象として結合対象が空想される。結合対象は、最初は「ペニスを持った女性」という恐怖の対象として登場したが、Klein (1932) は、エディプス・コンプレックスの早期段階の検討の中で、その対象は結合した両親 (結合両親像) を意味していると理解する。結合両親像は、その段階において、IIで述べた母親のよい乳房との最初の愛情関係が得られない欲求不満時の母親の内部や不在の母親についての無意識的空想であり、Vでも述べたように、それは両親が永久に性交し続け、満足を共有し、赤ん坊を作り続け、また、共謀して乳児に対抗してくるというものである。そのために、結合両親像には、その状況での飢餓感などの苦痛、さらにその苦痛を抱えている自分とは違って父親と違って永遠に満足を得ている母親や母親の胎内にあるペニスや赤ん坊に対する羨望が向けられる。そして、母親からペニスを奪ったり、胎内に排泄物を投げ

入れ汚す空想を母親の内部に対して抱く。そして逆に自分の身体も攻撃され、内部が破壊されたり奪われたりするのではないかと空想し迫害的な恐怖を抱く。また、両親が互いに永遠に満足を与え合っているという空想だけではなく、攻撃性が投影された場合には万能的で破壊的となったペニスによって母親の胎内が破壊され続けるという空想にもなる(図4)。このような結合対象は、取り入れられ悪い結合対象として内在化される。内在化されたこの結合対象と並行して、個々の母親や父親、特によい母親の内在化によって、母親の内部にある父親のペニスに対する空想も力を失い、結合両親像の対象表象はそれぞれの人物像として分離されてゆくと Klein は述べている。Klein においては、結合両親像は、終始悪い結合対象であり、恐怖の対象として描かれている。

このような結合対象は、よい対象の内在化とそれへの確信を阻害する空想として注目されたために悪い結合対象なのであろう。

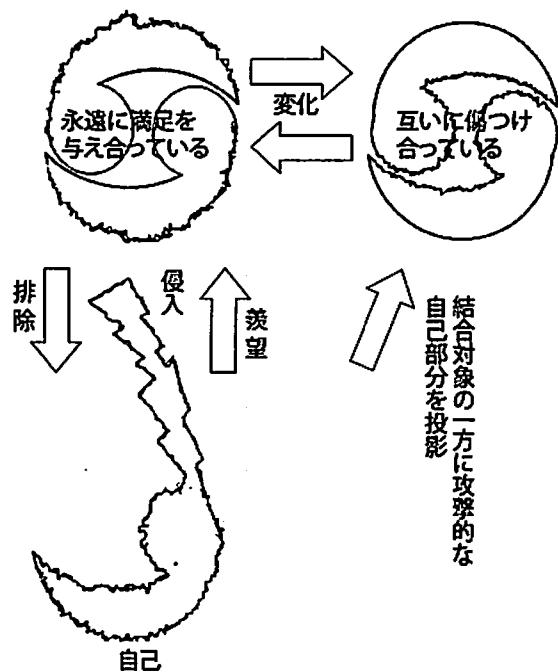


図4 悪い結合対象

これに対して、Kleinの死後、よい結合対象としての内的対象への同一化が成長に影響するという理解が Post-Klein 派内で共有される (Sanders, 2001)。

すでに触れたが、Meltzer (1973) は、病理構造体の先駆的研究の中で、内的な両親とその創造的性交の償う能力について述べている。さらに、Meltzer は、自己愛的な病理構造体の観点を導入し、フロイトの

神一性理論を改訂しようとした。彼は、成人の性愛が、病理的な倒錯に向かうのではなく、多形傾向となるための取り入れ基盤として、創造的な結合両親を取り上げた。成熟した性生活の無意識的基礎は、創造的な内的両親の性関係である。そこから、男性的役割と女性的役割の両方を取り入れ同一化することができ、それによってよく統合された両性を獲得し、パートナーとの投影および取り入れ同一化を通して、親密性を深めることができるという。

また、Meltzer は、創造的な内的両親の取り入れによるこのようなパートナーとの交流を記述する際、Bion (1962) のコミュニケーション様式としての投影同一化の正常な使用との類似性を指摘している。つまり、創造的な内的両親は、正常な投影同一化の使用である K によるコミュニケーションを成立させる基盤として機能すると捉えているのである。

さらに、Meltzer は、関係性の三重構造として、創造的な結合両親と母親対象および自己との関係を記述している。こころの健康や安定の基礎の中核にはまず、自己の乳幼児部分的内的母親への依存がある。その依存は2つあり、1つはこころと身体の苦痛の投影を受け入れる母親の能力への依存であり、2つめは、自己の中にその投影された部分を取り戻すにあたっての、母親の能力への依存である。そして、Meltzer は次のように述べる。

これら二つの内的母親の原初的機能に関連して、今度はその内的母親が内的な父親やそのペニスや二つの睾丸に依存しているという関係が、内的母親が生き延びるために、そして内的-母親の-内部の-赤ん坊が生き延びるために不可欠なものとして経験される。そして内的母親の幸福は、母親の寛大さや慈悲深さが生まれるために必要な条件として感じられる。

このように自己は、内的母親に依存する時に、その死が戦慄を引き起こす内的母親や内的-母親の-内部の-赤ん坊を生き延びさせる機能を果たしている内的父親の存在を不可欠なものとして認識する。このカップルが創造的な結合両親である。それは、Klein が記述した母親の胎内で破壊的になるペニスの空想とは対照的に、創造的に母親と結合しているペニスを含んでいる。それでは内的父親やそのペニスや睾丸はどのような機能を果たすのであろうか。Meltzer は上の引用部分に続いて次のように述べる。

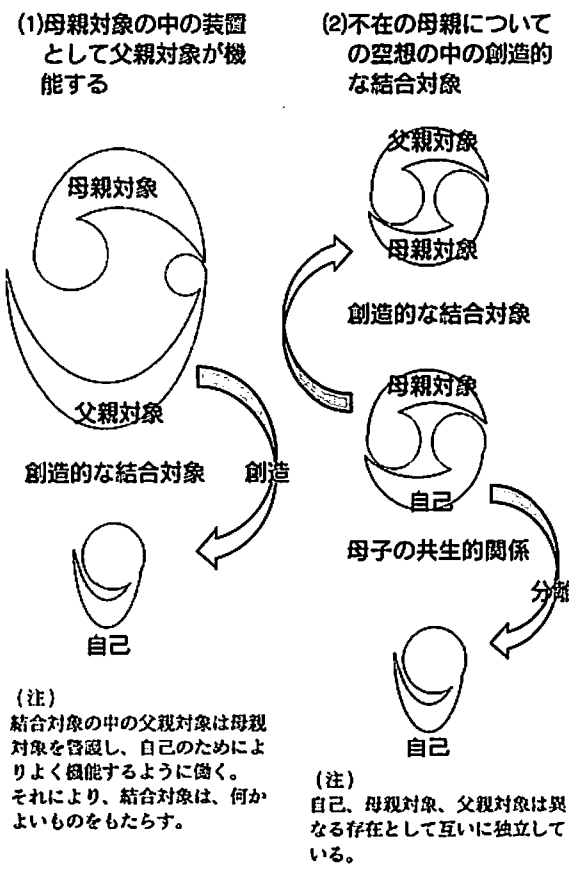
しかしながらより早期の形態、つまり、部分対象レベルでは、乳房はトイレの機能（苦痛を受け入れる機能；筆者注）と栄養を与える機能の両方をもつものと感じられるが、全体対象レベルで母親の身体を上と下に分割することは、母親の内部において排泄物を乳房やミルクからはっきり切り離しておけると乳児が確信することの必要性を表している。それゆえ無意識的空想において、母親の身体空間は上、前面の下、背面の下の三つに境界が引かれるようになり、それは乳房、性器、そして直腸に当てはまるのである。

排泄物が乳房やミルクと混同されてしまうところに、よいものと悪いものととの区別がつかなくなる混乱が起きる。その混乱を防ぐことはよい対象への確信を維持するために必要なのである。これは Klein 以来強調されてきたことである。Meltzer によると、それを防ぐために内的母親の身体空間の領域が混乱しないようにしているのが、性交によって母親の内部に取り入れられたと感じられるペニスである。乳幼児にとっては、それは、母親自身の備品の一部を形成し、三つの

領域で、秩序維持と保護の役割を果たすと感じられている。つまりそのように取り入れられたペニスは内的母親を創造的に機能させる。ミルクの流れは乳首-ペニスによって調節されると感じられ、三つの領域の区別は、内部の-ペニスの警護機能と感じられる。また、二つの睾丸をもったペニスは、精液を不可欠の要素として持っており、償いの役割を果たすと感じられる。さらに、母親の身体の三つの空間領域は、膣口、肛門、口という開口部を通して、父親のペニス-と-睾丸との間でそれぞれ独自の関係をもっており、精液は、性器の中では赤ん坊に栄養を与え、直腸を洗い流し、ミルクを作るための原料を与えると感じられるという。このように結合対象は、母親や父親の部分対象が結合することで、自己の乳幼児的部分に対して内的母親が、IIで述べた愛情関係や共生的関係の中でよりよく機能するように働くのである（図5(1)）。

Meltzer によると、このような内的両親としての結合対象は、超-自我-理想 (super-ego-ideal) の起源となる。Meltzer が、超-自我-理想の起源を考察するために取り上げた臨床素材は、抑うつポジションへと着実に歩みを踏み入れて、ほぼ改善しているが、何か欠けており、それが患者の安定をひそかに傷つけ、創造的想像力を阻んでいるという事例である。また、その男性の女性性はまだ充分には統合されておらず、容易に切り離され投影されていた。また破壊的な部分は、外には投影されていなかったが、未統合な状態でひそかに保たれていた。彼が1年の間隔をおいて見た二つの夢が Meltzer によって比較されている。はじめの夢の中で患者は、男根的で勇敢な行動を、よい父親対象である父親の通りしていたのであって、ゴールまでもがそうであった。それについて、Meltzer は、その父親と同じゴールに到達することを気にしている限り、そこには患者自身の関心や願望の追及にまつわる臆病さだけではなく、負荷がかかったときに行う内的対象との投影同一化の放棄に真正面から取り組めない問題が残されているという。そして、Meltzer は1年後の夢の解釈として、次のようにいう。

それは、父の後援を受けているもので、父のしている通りのものではなかった。患者の女性性一二人の中年の看護師（夢に登場する人物；筆者注）一がより統合されたものとなっているという証拠を忘れてはならない。内的対象-ボール (Ball) 博士（夢に登場する人物；筆者注）と彼の教授の椅子という今や結合対象一の信念に鼓舞されて (under the inspiration of the



principles of his internal objects – now a combined object—) 興味関心を追求し仕事をこなすことにおいて、夢の中にゴールを示唆するものではなく、目標 (aims) だけがあった。

この夢を見た背景には、ポール博士は実在する人物で、尊敬されており最近教授になったという事実があった。これらの事実は翠丸と関連があるという認識は斥けられるべきものではないと Meltzer はいう。この理解の中ではペニスと翠丸の結合対象、男性性と女性性の結合対象、が示されているのである。そして、それが、負荷がかかったときの内的対象との投影同一化の放棄にかかわることも示されている。男性患者は、負荷がかかった状況においては、男根的な内的父親対象に投影同一化して、父親の通りに振舞っていたのである。しかし、今やその男根的な内的父親対象は、翠丸との結合対象となる。そして、父親対象に投影同一化することで獲得していた男性性は女性性と統合される。訳者は principles を信念、inspiration を鼓舞と訳しているが、そのような結合対象の principles の inspiration のもとでは、内的父親の通りではなく、内的父親の援助を受けて「私」が、自らの興味関心にしたがって、目指すところを決めて、進んでいけるようになることを、Meltzer はここで示そうとしている。ところで、そのような結合対象の principles —ものによって立つ原理、原則—とは何であろうか。筆者は、それは、異なるもの同士の創造的な結合がよいものをもたらすという原理ではないかと思う。訳者のように信念という言葉に当てるとそのような原理についての信念であると思う。結合対象のそのような原理から、「私」が現実と接触し、現実のものと結合するとき、「私」の目標に向かうためのインスピレーションがやってきて、それが「私」を導くという意味も Meltzer はこの文によって表現しようとしていると思う。筆者の理解に従ってさらに言うなら、結合対象のもとで、その時々々の現実を生きる「私」が形成される。正確にいうなら、自分の関心や願望に従って、外界現実の中を生きようとするところに、結合対象の原理からインスピレーションがやってきて、その外界現実を生きていくための「私」が創造されるのである。

そのような結合対象を起源とする超-自我-理想 (super-ego-ideal) は「私」でないものであり、「私」を超えるものである。「私」はそれへの依存を経て、やがて、それに鼓舞 (inspiration) されながら、その後援を受けて、自立に向かう。Meltzer によると、それは、は

じめはすでに述べたような両親の原始的な取り入れに由来しているが、それに導かれ、また鼓舞されながら「私」が外界で見出すさまざまな特質を取り入れ、超-自我-理想は変化し成長してゆくという。

超-自我-理想という名称の由来を Meltzer は説明していないが、いかにも、自我を中心とした、超自我と自我理想の、または超と理想の結合のようである。それは、「私」では決して届かない、「私」を超えた理想 (Meltzer は超-自我-理想を内なる神とも表現している) であるが、それは自我を脅かす理想ではなく、その超-自我-理想と創造的に結合することで、「私」が自立して一人で外的現実の中を歩み、未知の対象と出会うために、後援し鼓舞することで「私」を支える人格部分である。それが結合対象の最終的な姿であることをこのような表記で表現しているように筆者には思われる。(図6)

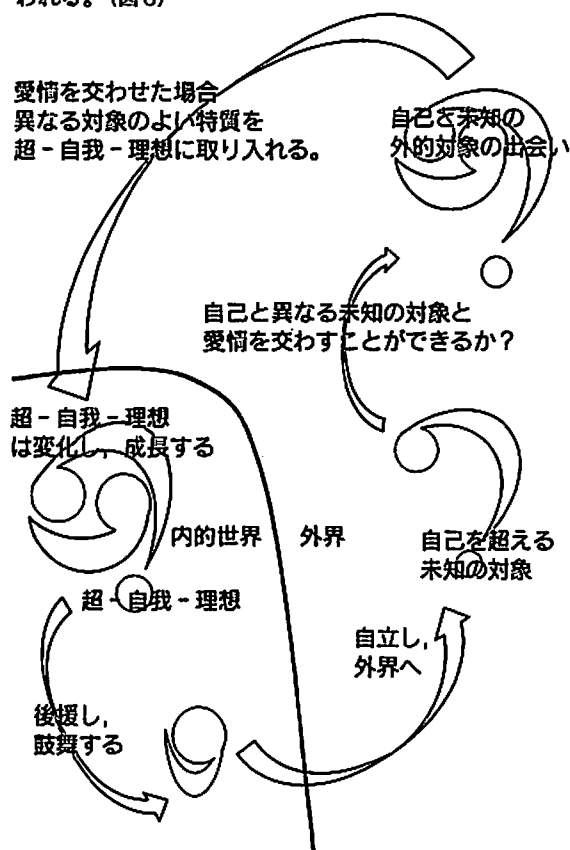


図6 超-自我-理想となる創造的な結合対象

上述した臨床素材にもあったように、Meltzer の記述をみると、両親のみならず、ペニスと翠丸のように、乳首と乳房など母親と父親それぞれの部分がまた創造的に機能するように結合したものが原初的な結合対象として捉えられている。これは、自己のま

とまりのない原初的な段階から結合対象は存在すると Meltzer が考えていることを示している。ところで、本来乳房と乳首は一体である（本来人間の体は一つである）。一体であるものが、異なる二つの領域に境界によって分化することについて、例えば地面について考えてみると、地面が地続きでありながら国境があるのは、地面の問題なのではなく、人間の認識の問題である。地形の形状と力関係に合わせて、領域の境界は引かれる。地面は認識の中で2つの異なる領域に分化する。乳首-乳房という結合対象という認識は、認識の中で乳房を異なる二つの領域に分化させて、それらの異なるもの同士が乳児自らのために創造的に結合しているという空想である。そのような空想が生まれるのはそのような認識を乳児が必要としているからである。Meltzer は臨床観察に基づいてそのような考えに至ったのであろう。

すでに述べた principles についての推察に従うと、Meltzer の創造的な結合対象において最も本質的なことは、“異なる”もの同士の創造的結合であるということである。そして、その結合は、Bion の共生的関係にある α 母—それは、その対象が相手の中身 (contained) になると同時に相手にとってのうつわ (container) になる結合—の体験が基盤となっており、また、その関係性自身もまた異なるもの同士の結合によって創造されていると空想されていると考えてよいであろう。そして、なぜ、結合対象という認識が必要となるかという問いには、それぞれの存在は、単独での創造はなく、異なるものとの結合によってはじめて何か創造されるという考えが Meltzer にはあるのではないか。本来一体である乳首と乳房が認識の中で分化され、異なるものとして結合されることにより、乳児の中に何か創造されるのである。乳児によって必要とされ、創造されるものとは、例えば、乳児自身のために異なる対象群が協力しているという思考などであろう。また、このように Klein や Bion の著作を検討してみると、創造についてのそのような考えは、明記されていないものの、Klein や Bion と共有されているようにも思われる。

そして、先程の Meltzer の臨床素材が暗示しているように、そのような結合対象という概念が対となっているのは、同一化の概念であり、結合対象が同一化を捕う概念であると筆者は考える。同一化は、投影であれ取り入れであれ、よいものと悪いものとを混乱させることにもつながる。というのは、異なるものを一つにするからである。それに対して、結合対象は、異なる

るものが最終的には一つに融合しないことを保証している空想についての概念である。もし一つになるなら、結合対象はそう認識されずに、対象か自己と認識されるであろう。乳首-乳房がそれと認識されずに乳房として認識されるようにである。悪い結合対象は異なっているもの同士が一つのセットになっているから羨望を引き起こすのである。よい対象がそれとは異なる悪い対象と結合し、羨望を帯びた悪い結合対象の一部になっているのである。そこではよいものと悪いものの混乱が起こるが、その混乱を区分けできるのは、結合対象という異なるもの同士の結合という認識による。そして結合対象の中の混乱は、外界にいる現実の母親対象の α 機能に支えられて識別されていき、最終的には、異なるもの同士の“創造的な”結合対象に行き着く。結合対象そのものがその識別の舞台としても働くのである。その過程では、創造的な結合対象に向かうことと、母子が共生的関係となることとは表裏一体の関係であり、父母子それぞれが、それぞれのために異なったまま、創造的に結合することに向かうであろう (図5(2))。また、その過程では、VI で示したような自己愛的で融合的な同一化が α 機能によって自己と対象に識別され、その同一化から自己が脱してゆくことも並行して起こるのであろう。

また、結合対象が同一化の対になっているばかりでなく、同一化を捕うというのは、これもまた、Meltzer の臨床素材が示しているように、結合対象が創造に関係するからである。同一化は、それによって、同一化した対象の特質を取り入れることはできるが、単に同一化しただけでは、そこから何かを創造することはできない。分化が起こらない限り、創造的な結合はない。取り入れた特質が自己との間で創造的に取り入れられるためには、自己が同一化から脱してその特質は自己と異なるものであるという認識が必要である。創造には、自己とは異なる対象—異なる自己の場合もありうる。投影同一化していた自己部分が戻るときにもたらされる変化もそのような創造であろう—との結合が必要である。同一化との関係でみると、創造的な結合対象は、自己がその中の一方に同一化することにより、もう一方の異なる対象と結合し、交流することで何かを創造するための基盤となる。対象との間での投影および取り入れ同一化をする際に、それが創造的であるためには、対象との共通基盤が必要であると同時に対象と異なる認識も必要であり、それを保証しているのがよい創造的な結合対象なのではないだろうか。つまり結合対象とは、自己と対象は異なるという認識に至

ったとしても、よい対象はよいままであり続けることを実感するための場所である。そして、それは「私」とは異なって「私」の外部にあって、よい対象同士が何かを創造し、「私」にそれをもたらそうとしてくれるのかを考えるための場所である。それゆえに、私たちが外部にあるものと創造的に異なることと同じであることを認識して創造的に交流するためには、創造的な結合対象に起源を持つ超-自我-理想が私たちの内側にあることが不可欠であることを Meltzer は示そうとしているというのが筆者の理解である。

結合対象についてまとめると以下ようになる。

(1)結合対象は、対象が自己とは異なるものであるという認識を保證する概念である。同一化は、投影であれ取り入れであれ対象と自己を融合することに基づいており、それとは対照的な概念である。

例えば、よい対象が自己とは異なる存在であるという認識は結合対象という概念によって支えられている。まず、結合対象は異なることの痛みを引き受けるうつわとなる。よい対象が自己とは異なる存在であるがゆえに、結合対象として、自己とは異なる別の対象と結合することによって悪い対象となるという認識から、よい対象が自己と異なる対象と結合し、外部で何かを創造し、自己にその何かよいものをもたらしてくれるという認識へと、自己とは異なるよい対象についての体験が結合対象といううつわの中で悪いものからよいものへ変化してゆく。この認識の深化がよい対象への確信を強める。

(2)何かを創造するための、異なるもの同士の結合という認識もまた結合対象という概念によって支えられている。つまり、創造的な結合対象は、二つの異なるもの同士が、よい存在であるという共通基盤を共有し、同じでありつつも異なることによって何かを創造するという創造的なありかたを示す概念である。自己が、創造的な結合対象の中の対象のうち的一方に同一化して、もう一方の異なる対象と関わり何かを創造してゆくための基盤となる人格部分が結合対象である。さらに結合対象は、「私」とは異なり、「私」を超える外部にある未知なるものと創造的にかかわろうとしてゆく自己を支える基盤<超-自我-理想>となってゆく。

最も簡潔にいうと、結合対象は、対象との同一化というかわりを創造的に機能させる基盤である“異なる”という認識を支える概念であるといえるだろう。

VIII. よい対象との共通基盤の喪失と回復に関わる概念間の関連

IIからVIIまでにあげた諸概念間の関連を明確にしながら、以上の内容をまとめてみると、次のようになる。Klein (1955) が、よい対象との愛情関係として描いたのは、愛情を与え与えられる関係であり、よい対象によい感情を感じている人格部分が、よい対象との共通基盤であるよい自己の萌芽である。最初のこの段階では、対象があり、それに対する自己は明瞭には認識されていない。そこでは対象はやってきては消える存在である。よい対象がやってきては消える。悪い対象もやってきては消える。その過程の中で、欲求不満に対してIIIで述べた様々な防衛がとられる。

自己の認識の芽生えとともに、対象に対する認識も変化すると同時に、羨望や自己愛の認識も芽生え始める。対象については、自己がここにあり続けるように、対象もここにはいないが残り続けると認識されるであろう。羨望が優勢な場合では、そのような自己と対象は一男の結合となり、優位-劣位の奪い合う関係性となりかねない。羨望に刺激されて、創造的で生命の源泉であるよい対象に対して、優位性を保とうとして、よい対象を必要とする依存的な自己部分の痛みや羨望を回避するために、自己を理想化し、病理的構造体によって組織的に防衛される。しかし、分離の事実は、依存感や羨望を感じさせざるを得ない。そして、対象の見えない部分—対象の内部—や‘不在の対象’そのものは、悪い結合対象の空想の場所となる。そこでは、欲求不満に彩られて、よい対象であったものが異なる悪い対象と結合し、混乱し悪い結合対象として空想される。最初に Klein が取り上げた結合両親像は、そのような対象についての空想である。このように結合対象は、創造的で生命力の源泉であるよい母親対象への羨望のうつわとなる対象である。そして結合対象やその一部の母親対象は、激しい攻撃にさらされ、また迫害的な恐怖の対象となる。

しかし、内部や不在時の空想の中にいる結合両親に妨害されながらも、また、よい対象と融合的に同一化したり、自己を分裂させて、破壊的な自己部分が依存的な自己部分を支配し、よい対象との愛情関係を回避するような防衛によって妨害されながらも、外界現実のよい母親対象がよい対象としてあり続け、内在化されることが進展の要になる。その時、子どもや被分析者が経験できるのは、空想の中ではなく現実と根差しているα機能を提供しているこの母親対象との体験であり、そこで共生的な男を体験することが必要であ

る。精神分析的な臨床の中核はそこにあるだろう。

Meltzerは、悪い結合両親像が単に解消されるのではなく、よい母親対象に対する羨望に母親対象やその内部の対象が持ちこたえ、生き延び、変わらず創造的に機能するために、その母親対象を守り、癒すよい父親対象が乳児によって必要とされることを強調している。そこで空想される結合対象は、異なるもの同士が結合し共生して創造的に一そして子ども(自己)のために何かを生み出そうとしている結合対象である。その結合対象は傷つき混乱しそうなよい対象を守り、機能させるうつわとなる。そして、次第に悪い結合対象よりも、よい対象同士が結合して自己にとってよいものを創造してくれるという創造的な結合対象が確信されていく。そして、そのような結合対象を得て、自己は、よい対象やそのうつわとなった対象—結合対象の双方それぞれ—に同一化することで、一方に同一化しながら、異なるものと何かを創造していくことを経験する。さらにそのように創造的な力をもつ、自己とは異なる結合対象は、最終的には超-自我-理想となる。それはいつまでも到達することはできない、自己を超え、かつ支える理想である。超-自我-理想と創造的に結合することで、自己は、外界現実の中を、歩み、そこで出会う未知の外界対象との間で創造的な結合をしてゆくことを鼓舞され、導かれていく。

VIII. おわりに

原初的な愛情関係で体験されるよい対象との共通基盤としてのよい自己の萌芽は、対象の不在に脅かされる。さらに、まとまりとしての自己の認識が芽生え始めるとともに、羨望によって脅かされ、自己愛的な防衛によってよい対象との接触を絶たれることも起こりえる。それは、自己の認識とともに、よい対象が自己と異なる存在であることを認識せざるを得ないからである。このように、対象の不在に対する防衛、羨望、さらに加わる自己愛的な防衛の要因が、よい対象との共通基盤としてのよい自己への確信を切り崩す。さらに、よい対象が自己とは異なる存在であるために、よい対象はその羨望のうつわとなる結合対象の中で、そのよさが破壊される。その時も、共通基盤は破壊され、見失われかねない。しかし、そのような結合対象の中にあつて、よい対象が破壊されず繰り返しよい存在としてあり続けることで、異なる存在の中に再び同じ共通のもの—愛情を与え、与えられる関係を求めているよい存在であること、または、それを求めていることを理解しているよい存在であること—を見出すこと

で、自己は、異なる存在であるよい対象との間に共通基盤を再び見出し、自己の内側により対象との共通基盤—よい自己—があることを確信していけるのであろう。

そして、そのような過程を経て見出された創造的な結合対象は、自己とは“異なる”よい対象に同一化してそれを取り入れる基盤ともなるし、同時に、そのような“異なる”対象との間で何かよいものを創造する基盤ともなるといえるだろう。

このようによい対象との失われた共通基盤を求める過程は、自己とは“異なる”対象との創造的な同一化を可能にする創造的な結合対象の獲得に向かって進む。

文献

- Bion, W. (1962). *Learning From Experience*. Heinemann. 福本修(訳)(1999): 経験から学ぶこと。精神分析の方法Ⅰ。法政大学出版社。
- Bion, W. (1963). *Elements of Psycho-analysis*. Heinemann. 福本修(訳)(1999): 精神分析の要素。精神分析の方法Ⅰ。法政大学出版社
- Green, J. (1950). *Si j'étais vous....* 原田武(訳)(1979): 私があなたなら。青山社。
- Heimann, P. (1942). A contribution to the problem of sublimation and its relation to process of internalization. *International Journal of Psycho-Analysis*, 23, 8-17.
- 平井正三(2011). 精神分析的心理療法と象徴化—コンテインメントをめぐる臨床思考—。岩崎学術出版社。
- 岩橋宗哉(2010). カップルの中のエディプス—生み出される思考とその機能—。福岡県立大学心理臨床研究, 2, 3-14.
- 岩橋宗哉(2013a). 「対象喪失」とその乗り越えに向かう神話としての古事記上巻(Ⅰ)—「不在の現実」についての「見るなの禁止」から「居場所」の形成へ—。福岡県立大学心理臨床研究, 5, 3-12.
- 岩橋宗哉(2013b). 「対象喪失」とその乗り越えに向かう神話としての古事記上巻(Ⅱ)—「私」の形成—。福岡県立大学心理臨床研究, 5, 13-20.
- 岩橋宗哉(2013c). 「対象喪失」とその乗り越えに向かう神話としての古事記上巻(Ⅲ)—「異煩性」についての「見るなの禁止」から「対象喪失」とその乗り越えへ—。福岡県立大学心理臨床研究, 5, 21-27.
- Klein, M. (1932). *The Psycho-analysis of Children*. Hogarth press. 衣笠隆幸(訳)(1997): 児童の精神

- 分析. 誠信書房.
- Klein, M. (1946). Notes on some Schizoid mechanisms. In *Envy and Gratitude and Other Works*. Hogarth press. 伊藤沈(訳)(1985). 分裂機制についての覚書. 妄想的・分裂的世界. 誠信書房.
- Klein, M. (1957). *Envy and Gratitude*. Hogarth press. 松本善男(訳)(1985). 羨望と感謝. 羨望と感謝. 誠信書房.
- 松岡正剛(2008). 神仏たちの秘密. 春秋社.
- Meltzer, D. (1973). *Sexual States of Mind*. Clunie Press. 古賀靖彦・松木邦裕(監訳)(2012). 此ころの性愛状態. 金剛出版.
- Rosenfeld, H. (1971). A clinical approach to the psychoanalytic theory of the life and death instincts: an investigation into the aggressive aspects of narcissism. *International Journal of Psycho-Analysis*, 52, 169-178. 松木邦裕(監訳)(1993). 生と死の本能についての精神分析理論への臨床からの
- 接近—ナルシズムの攻撃的側面についての研究—. メラニー・クライン・トゥデイ②. 岩崎学術出版社.
- Sanders, K. (2001). *PostKleinian Psychoanalysis—The Biella Seminars—*. Karnac Books. 中川慎一郎(監訳)(2013). ポスト・クライン派の精神分析—クライン、ピオン、メルツァーにおける真実と美の問題—. みすず書房.
- Spillius, E. (1988). *Pathological organizations. Introduction*. In *Melanie Klein Today, Volume I*. 松木邦裕(監訳)(1993): 第4部人格の病理構造体 総説. メラニー・クライン・トゥデイ②. 岩崎学術出版社.
- Steiner, J. (1993). *Psychic R'treats: Pathological Organization in Psychotic, Neurotic and Borderline Patients*. Routledge. 衣笠隆幸(監訳)(1997): 此ころの退避—精神病・神経症・境界例患者の病理的組織化—. 岩崎学術出版社.